

「学び」からアプローチをする生徒指導

—生きる力をはぐくむ学習環境—

藤田 耕平

1 はじめに

「先生。俺たちは体育の授業はサッカーしかやらないから。」

着任したA中学校で、新三年生の生徒が最初に投げかけてきた言葉。

A中学校は、生徒数は少ないが問題の発生件数が多く、保護者、地域からの信頼を失いつつあった。正常な学校運営が出来なくなっている時は、どの学校であれ立て直していくことは容易なことではない。かつては、教師の高圧的な指導により問題行動を抑え込んだ。ある時は校則を増やし、従わない生徒は帰宅させた。指導の中心は、力に自信のある男性教諭が中心であり、その結果、問題行動の発生件数は減少したかのように見えたものの、問題は潜在化していった。

学校の正常化を図るためにはその背景をしつかりと捉え、「立て直しの柱とするもの」を共有し、課題を明確にして解決していかなければならない。

今回の新学習指導要領の改訂における背景を理解・認識しながら、かつての取組実践を児童・生徒指導との関連から考察していく。

2 新学習指導要領と児童・生徒指導との関連

現行学習指導要領では、「第5節 教育課程実施上の配慮事項

- 1 生徒の言語環境の整備と言語活動の充実
- 2 体験的・問題解決的な学習及び自主的・自発的な学習の促進
- 3 生徒指導の充実
- 4 進路指導の充実
- 5 ガイダンス機能の充実
- 6 見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の重視

の6項目から構成されている。

今回の学習指導要領では、児童生徒指導に関する項目を、

「第4節 生徒の発達の支援」

- 1 生徒の発達を支える指導の充実
 - (1) 学級経営、生徒の発達の支援
 - (2) 生徒指導の充実
 - (3) キャリア教育の充実
 - (4) 指導方法や指導体制の工夫改善などの個々に応じた指導の充実。

- 2 特別な配慮を必要とする生徒への指導

- (1) 障害のある生徒への指導
 - (2) 海外から帰国した生徒や外国人の生徒の指導
- を取り上げている。

学習指導要領改訂に伴い、構成が大きく変わったところに、今回の「資質・能力の育成」に関するねらいが見えてくる。

人工知能の飛躍的な進化は、社会的背景の変

容に留まらずしくみに影響を与えていくであろう。学校における知識の習得の意味や学び方が大きく変わることにも繋がる。しかし、人工知能がどれだけ進化しても、正しいことを判断する力、美しさを感じる心の大切さは変わることがない。

I C Tの進化は、S N Sを介して様々なトラブルを生み、情報モラルやマナーなど保護者との綿密な連携に加え、その法的根拠も共有する

必要性が生じている。学校では情報教育に加えて、犯罪防止等生活指導に関わる法律面での指導徹底の重要性が高まっている。

グローバル化も学校現場には様々な話題・課題を提供する。言語の違いだけでなく文化・生活習慣の違いは、時として安心・安全に生活できるはずの学校内でトラブルを引き起こす。

このような背景と想定される社会変化を踏まえ、

子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

『中学校学習指導要領解説 総則編』(1) 改訂の経緯

と示されたのである。

総則改正の要点に、改定の趣旨が教育課程の編成や実施に生かされるようにする観点から、①資質・能力の育成を、目指す「主体的・対話

的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める、②カリキュラムマネジメントの充実、③生徒の発達の支援、家庭や地域との連携・協業を重視するとし、その内容は

- ・生徒一人一人の発達を支える観点から、学級経営や生徒指導、キャリア教育の充実について示した。
- ・障害のある生徒や海外から帰国した生徒、日本語の習得に困難のある生徒、不登校生徒、学齢を超過した者など、特別な配慮を必要とする生徒への指導と教育課程の関係について示した。
- ・教育課程外の学校教育活動である部活動について、教育課程との関連が図られるようにするとともに、持続可能な運営体制が整えられるようにすることを示した。

『中学校学習指導要領解説 総則編』(3) 総則改定の要点

としている。

児童・生徒指導における基本、すなわち児童・生徒の「自己実現」へ向けて、学校教育が目指すものを示唆している。つまり、児童・生徒指導はその問題行動への対処だけに留まらず、学校教育全般において、つまり教育課程に位置づけられるものとして扱うべきなのである。それは教科・領域を含む全ての教育活動で展開されるものであるといえる。

当時、A中学校での実践は、課題解決のために取り組んだことではあるが、新学習指導要領の方向性と一致していたことは決して偶然では

ない。

3 生徒の内面からあふれる思い

(1) 出会いと気づき

A中学校は、全校生徒160名に満たない小規模校であった。学校周辺は、繁華街・歓楽街等と、役所などの公官庁に加えて多くの商業ビルが立ち並ぶ。かつて遊郭のあった町が学区内にあり、その恩恵を得るために生まれた社会構造も特徴の一端となっていた。

着任して見えてきたことは、「遅刻の常習化」

「いじめ」「生徒間暴力」「授業離脱」等三年生を中心に多くの課題を抱えていた。

三年生が過ごしてきた二年間は、数々の問題行動を起こし、職員の指導に従わない生徒が少なくなかった。

その彼らが私に最初にかけた言葉が冒頭に述べた言葉。

「俺たちは去年、体育ではサッカーしかやってきていないから。俺たちはサッカーしかやらないから。」だった。ぶっきらぼうな言い方で

あったが、「目」から敵意を感じることはなかった。しかし、若い頃の出会いであれば、確実に衝突をしていただろう。

初任校での経験で、生徒指導の捉え方、考え方の基盤を身に付けることができていたため、その生徒の言葉の背景を感じとることができた。それは、その後の多くの生徒との関わり方や学校運営に関する改善の視点へとつながっていった。

児童生徒理解は、一人一人の児童生徒を客観的かつ総合的に認識することが第一歩であり、日ごろから一人一人の言葉に耳を傾け、その気持ちを敏感に感じ取ろうとする姿勢が重要です。

『生徒指導提要（1）生徒指導の基盤となる児童生徒理解』

児童生徒理解においては、児童生徒を多面的・総合的に理解していくことが重要であり、学級担任・ホームルーム担任の日頃の人間的な触れ合いに基づくきめ細かい観察や面接に加えて、学年の教員、教科担任、部活動等の顧問などによるものも含めて、広い視野から児童生徒理解を行うことが大切です。

『生徒指導提要（1）生徒指導の基盤となる児童生徒理解』

（2）学校の課題分析と課題解決へ向けて

生徒が教師集団を信頼していないことは、着任早々の雰囲気で気がついた。

事前に聞いていた生徒の取組、説明を受けた指導の過程はことごとく覆されていく。

決まっていたとされていた修学旅行へ向けての班づくりでは、「誰が決めた」「話が違う」と騒ぎ出し、20名近い生徒が職員室へ押しかけたのは、着任早々、始業式明けの4月7日の事であった。

生徒が問題行動を起こすたびに、声高に教員を批判する職員。その職員を中心に、ほぼ毎日、放課後事務室で開かれている同年代の教員による書道とお茶会。ことある度に管理職の非難を繰り返す職員。仕事に責任をもたず、連絡・報告・相談のできない職員等々。まさに、テレビドラマに登場するような学校であった。

職員が互いを認め、気遣いができないようでは、生徒への気遣いは程遠いことに気付かず、誰かの責任とする雰囲気が蔓延していた。

泥沼化している集団は、己を振り返ることは決してせず、その原因と責任を外に求め押しつける。職場では、生徒に課題が多いのは「保護者が悪い」「小学校が悪い」からであって、決して職場の個々の職員・職員集団としての指導力、方針の立て方、教育課程の編成から授業内容について見直すことはしていなかった。

当然、PTAの役員をはじめとする保護者とも溝が生まれぎくしゃくとしている。着任したばかりの私は、PTA会長より「先生はこの学校に何をしに来たのですか。何ができるのですか。」の一言は、様々な意味で生涯忘れることはない。

さらに、A中学校職員による小学校批判は聞くに堪えない状況であった。

当時A中学校は、3区三小学校から入学してきた。その中の一校は、オープン型教室による教育を行っていた。後年、自身が気付くのだが、学習環境については、それらを直接体験・運営の経験をしないと理解できないことが多い

ということだ。経験を重視しがちで、どちらかといえば保守的な教員の特性からは、「学校教育を施設面からも考える」という発想は皆無に等しいと言える。

オープン型教室は、「子どもが勝手に教室か

ら出て行く」という思い込みが先行し、そのために中学校の自分たちが苦勞しているという発想であった。そこでA中学校が抱えている課題について整理をしてみることにした。

【課題の整理】◎緊急課題 ○早急な課題であるが時間が必要	
学校を取り巻く環境、関係諸機関との課題	(1) 保護者
	◎教職員に対する不信任。 授業崩壊への不安。暴力行為・傷害事件への対応。
	◎PTA会長・役員を中心とした学校不信。
	○不安・不満を受け止める窓口が不明確。 管理職と各主任(教務・学年・生徒指導)の役割分担の曖昧さと担任の対応力不足。
	○期待する教師の不在。
	(2) 地域
	◎広がる不信任。
	学校の様子、情報が伝わってこない。
	中学生とのつながり、関係がない。
	職員の顔が見えない。
	(3) 学区小学校及び近隣中学校との関係
	◎学区小学校との相互の不信任。
	児童生徒指導に関する情報共有、指導方針の共有のずれ。
	教育方針、教育内容・方法への理解不足。互いの顔が見えない関係。
	○中学校間のトラブルに関する対応に相互理解、協力性がない。
	区をまたがる学校との連携不足。
	(4) 関係諸機関との連携不足
	○警察署との連携不足。
	○児童相談所、区役所との連携不足

整理した莫大な量の課題に、二の足を踏みそうになった。

日々繰り返される問題行動の多くは、職員に問題があるといって過言ではなかった。課題克服において、特に教職員の意識改革が早急に必要とされ、緊急課題と時間経過をかけて取組課題を明確にして、ベクトルを揃えて取り組むことを提案した。ここからのスタートは、職員一丸となって取り組むことが大切であることは言うまでもない。

4. 生徒指導と学校環境 ～逆転の発想へ～

いわゆる学校が荒れ初めに見られる兆候のひとつとして校舎へのいたずらがある。

特に便器へのいたずらは深刻な状況へ発展する可能性がある。校舎は古い、トイレの環境整備に気を遣っていることが伝わってくる学校は、生徒の雰囲気は落ち着いている。

荒廃してしまった学校の立て直しに、保護者の活動として一輪挿しを置いたりするのはその象徴的な活動である。

【課題の整理】◎緊急課題 ○早急な課題であるが時間が必要	
校 内 の 課 題	(1) 教育課程の形骸化
	◎編成の経緯・根拠が曖昧。選択教科の実施方法が整理されていない。評価・評定について、研修がなされていなく、情報共有がされていない。『学習指導要領』の理解不足。
	◎授業改善の必要性。魅力あるわかる授業になっているか。
	◎学級活動、生徒会活動等特別活動が停滞。計画的・継続的・日常的な取組の必要性。
	◎学校全体に欠けている人権尊重の意識。
	○「学校教育目標」への基本的理解と具現化するための手立ての創造力の欠如。
	○基本的な学力の定着を目指すための工夫と実践。 教職員自身の学校教育活動全般に対する失望感の払しょくが必要（職員の自己肯定感醸成）。
	○生徒が自らの将来を考える機会（キャリア教育の不足）。
	○教育課題の整理と焦点化。組織的実践力の向上。教職員の資質向上が急務。
	(2) 生徒指導
	◎「生徒指導」の基本的な理解と校内での基本方針。
	◎指導の在り方（対応）の改善。
	カウンセリングマインドを主とした指導。傾聴訓練やカウンセリング技術習得の必要性。
	○校則の検討と指導の在り方の共通理解。
	生徒への人権の配慮を踏まえた決まり事（共通理解・申し送り事項）の検討。
	○教育活動全体で行う生徒の居場所づくり、自己有用感、自己肯定感の育成。集団モラルの構築。
	(3) 職員集団
	◎職員間の不協和音。責任感があり見識のある職員リーダーの不在。
	◎教育課程の理解不足。授業モラル、規律の無い授業。
	○組織的な対応力と個の技能向上。
	○教育公務員として氏名と責任感の育成と職員集団の自浄作用の育成。
	教育公務員として守るべき法律・条令。服務規程。
	教育、社会情勢に対する広い視野と見識不足。

掲示物や進路関係のポスターが破られる、生徒の作品がいたずらされる、頻繁に繰り返される落書き等々、これらは全てサインである。

学校は、校舎の配置・構造上死角になる場所がある。自らが勤務する学校についての構造をどれだけの教員が知っているだろうか。死角になるような場所について、その対応で学校の指導体制や姿勢を感じることができる。

A中学校は、かつて中規模だった時代から生徒数が激減したために、余裕教室が多く生ま

れ、普通教室をL L教室、図書室、視聴覚室、防災備蓄庫として転用・活用していた。

特別教室は別棟に作られており、特に金木工室は校舎端の一階で人通りがない場所である。普通教室が設置されている各階には、倉庫化した余裕教室がありL L教室はほぼ物置場所となっていた。また、図書室は放課後のわずかな時間しか開館をしていなかった。

使わなくなったものを、教室を倉庫化させ教師の私物さえも置きっぱなしにする。その光景

を生徒たちはどのような見方をしていたのだろうか。

多くの職員が反対する中、通称「学年部屋」を設置した。その「ねらい」は、

- ①相談室の機能として活用（生徒と直接向かい合う場所、生徒と先生の語らいの場所）
- ②学習室の機能として活用（教室では勉強できない生徒、授業妨害をしてしまう生徒、補充的学習が必要な生徒への対応）として考えた。

三年生は、教室に隣接する広いベランダが格好の息抜き場であった。始業チャイムが鳴っても走り回る者、車座になり話し込む者、大の字になって寝転がる者など、思い思いの時間を過ごしていて、なかなか教室に入らない。やっと教室に入ったかと思えば15分も過ぎれば授業に飽きてしまうか、わからなくなって教室から出てきてしまう。片方のクラスから一人でもベランダに出れば、必ずもう片方クラスに影響が出る。魅力的な場所でありながらベランダ使用のルールは、出ることを禁止にしていた。指導はバラバラになり、守らせることが不可能になるだけでなく、守らせようとする教員と生徒のトラブル、指導しない教員の前では無法地帯となっていた。



教室とつながっているベランダ。魅力的な場所でありながら、生徒には出ることを禁止していた。

（1）向き合うことから～倉庫からの脱却～

倉庫化していた教室を「学年部屋」として整備を始めた。不用品を始末し机、椅子を揃え環境整備をしていると、数人の生徒が「先生、手伝うよ」と声をかけてくる。当然、彼らのねらいは授業をサボるための口実であったが、精一杯感謝の言葉を出しながら、時間を決めて手伝ってもらった。生徒指導担当で授業時数が軽減されていた私は、職員室へ戻ることなく、その部屋に居続けることにした。

今までの行動から素直に授業に入れない生徒、すぐに教室から出てきてしまう生徒たちと世間話や互いの話、勉強のこと、卒業後の事などの話しをした。

彼らの何人かの進路に関する展望は、自分たちが生活をしている地域の特性（繁華街）を反映していることが影響しているのか、お金を手にすること、そのための働き方は「〇〇でもやれば、食べていけるよ」といった何とかなるといふ漠然とした感覚をもっていた。

その中に見え隠れする不安。次第に、自分たちのことを語るようになった彼らは、なぜ教室に居ないのかも語るようになった。ほとんどの教科で授業内容が理解できないこと、また、そこに至るまで教室内で置きざれにされてきたこと。

「この部屋で基礎的な勉強をやるか。」の問いかけに、全員がうなずいたのは驚きであり、それまで、彼らにきちんと向かい合わずにきた職員へ、腹立たしさと怒りを感じた。

新教育課程では、児童・生徒指導が目指す育成すべき資質・能力を明確にして、具体的に学校教育に反映していくことであり、児童・生徒指導の考え方が、いわゆる対処療法でない積極的な取り組みを展開していくことの重要性を示している。

生徒指導とは、社会の中で自分らしく生きることができる大人へと児童生徒が育つように、その成長・発達を促したり支えたりする意図でなされる働きかけの総称のことです。

すなわち、学校生活の中で児童生徒自らが、社会的資質を伸ばすとともに、さらなる社会的能力を獲得していくこと（社会性の育成）そして、それらの資質・能力を適切に駆使して自己実現を図りながら自己の幸福と社会の発展を追求していく大人になること（社会に受け入れられる自己実現）そうしたことを願って児童生徒の自発的かつ主体的な成長・発達を支援していく働きかけのことを、生徒指導と呼んでいます。

『国立教育政策研究所 生徒指導リーフ 生徒指導って、何？』

3年の学年部屋運営の成功は、1,2年生の余裕教室活用（学年部屋）への開設のきっかけとなった。これらは、単に空き教室を開放するというものではない。

学年部屋運営の成功の鍵は、生徒の自主・自立、そして自律をどのように育てるか、生徒自らの可能性をどのように育てるか、職員に寄り添いの気持ちがあるかどうか問われる取り組みでもある。生徒任せでは健全な運営はできない。課題のある生徒だけが、我が物顔に使う場所ではなく、様々な立場の生徒が共有出来なくてはならない。そこには自分たちの手で活動場所（居場所）を維持運営していこうとする生徒活動（生徒会活動を含む）の充実、活性化が必要となる。

A中学校では、三行事（体育祭、合唱コンクール、文化祭）での勝負に対して、執着心が強く、物凄いエネルギーを掛け取り組む生徒の

姿があった。

反面、集団から離脱をしていく生徒も少なくない。生徒の個性・能力に応じた居場所作りが必要になる。不安や不満にいち早く気がつく寄り添いの気持ちが必要なのである。

その居場所の一つとして、学年部屋は大きな役割を果たすこととなる。

（2）学習環境の整備について

～学習集団・学習空間について考える～

生徒と向き合う職員が増えたことにより、学校全体としては落ち着きを見せ始めた。

次に目指すのは、基礎学力の向上である。

生徒にとって、学校生活の約70%が学習時間であり、授業がわからないことは苦痛でしかない。基礎・基本といわれる力、学習活動を保障するために、生徒たちに欠かすことのできない要素。まず、A校では「読む力・書く力・計

【授業に関するアンケートの主な項目】

得意な教科	()	()	()
	そう思う ←→ 思わない	そう思う ←→ 思わない	そう思う ←→ 思わない
授業が楽しい	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
よくわかる	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
その教科が好き	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
テストの点が良い	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
その他 (理由を書いてください)			

苦手な教科	()	()	()
	そう思う ←→ 思わない	そう思う ←→ 思わない	そう思う ←→ 思わない
授業が楽しくない	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
わからない	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
その教科が嫌い	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
テストの点が悪い	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④ 	① ② ③ ④
その他 (理由を書いてください)			

算する力」力をつけさせることを目指し、取組を始めた。

そのためには、「授業に関する調査アンケート」を作成することと、「学びの定着」を教科ごとに分析をすることとした。

授業に関するアンケートでは、その質問内容に異を唱える教師がいたことは既に想定内であった。これについては、特に管理職が必要性を伝え、授業改善への一歩につながることで押し切った。

「学びの定着」についての分析は、教師作問による定期テスト、市内一斉テスト等で、解答の通過率を分析した。解答通過率の分析を進めるにしたがって、教師の意欲・意識の高い教科では、「観点別評価規準に基づいた作問」を行うようになっていった。これらの分析結果から明らかになってきたことは、大きく次の2点であった。

- 授業に関するアンケートで苦手の意欲的が低い生徒は、書く力（漢字、英語）、計算力が低い。また、語彙力、単語力が低い。
- 文章を読み取る力が弱い。

まず試行として取り組んだのは、夏季休業中の補習授業、課題テスト（長期休業中に出題範囲問題を決めたプリントを渡し、その範囲のみから出題）を実施した。定着度の低い生徒であっても、事前に出題される内容が示されていると、ほとんどの生徒が前向きに取り組むようになった。また、異学年授業交流（小規模校の為、宿泊行事で補欠授業になるところを、数学を中心に3年が1年、2年が1年へ勉強を教える）を実施した。生徒の自尊感情を揺さぶることに着目をした。その結果、授業に後ろ向きだった生徒の多くが、一年生の課題を抱え職員室を訪れるようになった。結果、自己有用が高まっていった。さらに、感教師の授業力を高めるために、教師同士による授業のロールプレイを実施した。言葉使い、発問、板書の仕方を互いに指摘しあったのである。

着任3年目、全教師による授業支援システムを提案した。

理解の遅れがちな生徒に対して一斉授業では限界がある。そこで、一番定着に開きの見られる数学で、全教員による数学T T実施の提案である。当然ながら、反対する職員もいた。

【T Tの目指すもの】

- きめ細やかな指導を目指す。
- 教科担当にだけ任せるのではなく、全職員で組織的に対応する。

- 専門教科外の視点から生徒のつまずきに気付く。
- わからないで辛い思いをしている生徒に寄り添い、学習の相談相手になる。
- 授業を通して生徒指導体制を作り上げていく。

反対職員を説得し、これらを目標に展開をした。そして、翌年から、数学に於いて習熟度別学習（『習集団の弾力化』、2学級を3コースに分けて実施）、複数教科におけるT Tの実施へと発展した。既に学年の部屋は「語らいの部屋」だけでなく、学習部屋としての機能も果たすようになっていた。

取り組みが軌道に乗ることにより、教師の様々な工夫が始まった。

落ち着きを見せ始めてはいたが、図書室には度々、僅かな隙間の小窓から侵入し、内から鍵を開けた状態にして侵入し、隠れ場所とされていた。

その図書室を国語科と社会科で、授業で活用を始めた。日常的に使用することで、目が届くようになり、また、学校図書存在を知らせる

機会にもなったのである。

着任5年後、生徒の学びを充実させるために、新たな取り組みを行った。当時、四階には依然手つかず状態の倉庫部屋があった。

そこで、次の二点を提案した。



- 過去五年間、活用・整備された形跡がないので、不要なものは思い切って廃棄をさせて欲しい。その後、学習部屋として使用させて欲しい。
- 普通教室の扉を外させて欲しい。できるだけ学区小学校で実践しているオープン型に近い状況を再現してみたい。

整備され、学習部屋として活用しようとした部屋に、「社会科教室にしたい」と、強烈なアピールがあった。検討の結果、単に授業をおこなう場所でなく、「資料が活用できる部屋」にすることとした。

図書室から、歴史漫画や教科で活用できそうな書籍、地球儀、地図などを移設した。また、用務員の協力を得てカーテンレールを改良し、歴史上の人物画などを掲示した。

社会科教室設置の教育効果は、当初の想像を超えたものであった。

体育の好きな生徒が早々に着替えて授業に向かう、音楽の好きな生徒が音楽室に来てピアノを弾くように、社会科教室で資料を開く、歴史漫画を読むなど始業前に続々と生徒がやって来

る。

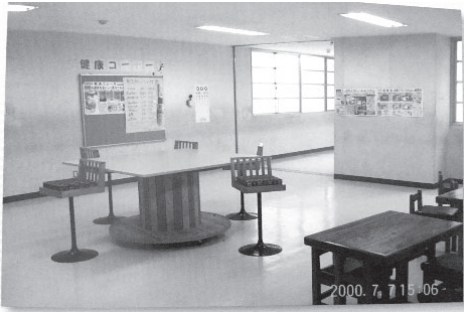
この姿は、「生徒のために何ができるか」を考える職員集団へと変容させるに至った。まさに「負の連鎖からの脱却」が始まったのである。

その中で、用務員の協力と発想・行動力は、目を見張るものがあり、感謝の言葉が尽きな



い。「こんなものがあると便利なのけど・・・」
「この空間をもっとうまく使いたいですね。」と

会話をすると、様々なアイデアが形となって実現をした。



写真右：昇降口に置かれたテーブルとイス。語らいの空間。

写真左：地域のお蕎麦屋さんからいただいたテーブルとイス。中央の大きなテーブルは廃材を活用した用務員さんの手作り。

昇降口に、テーブルとベンチを置くことにより、教師と生徒、生徒同士が気軽に談笑できる場所が生まれた。活用頻度が少ないトイレ脇に、読書コーナーや廃材を活用したテーブル、学区の店舗より譲り受けた椅子を設置。死角が無くなり動線を変えることにより、語らい、学びの場となった。

普通教室の扉を外したことにより、教室と廊下が一体化した学習空間となり、活動場面によっては、廊下に机をだしグループ学習・活動を行う生徒も現れた。そこで、廊下に机、テー

ブルを置き、本や学習資料などを置いてみることにした。図書室の本の一部分散化を試みた。この「図書の分散化」にも異を唱える職員はいた。

「本来図書は、分類管理されるべきである。」
「横浜市は備品扱いなので、紛失した場合の処理が大変である。」
「本の痛みが激しくなる。」

この議論は、後に教科教室が完成し、図書の分散管理、オープン型図書コーナーに発展していく上で、大切なものになった。議論の視点を絞り込み次のようにした。

○本は活用され、読まれて命が宿る。そのためには、目に触れること、すぐ手に取れることが大切。イメージは町にある「本屋」。

○本を自主管理できる生徒を育成しなくてはならない。借りたら返す。大切に扱う。という当たり前をできるようにする。

図書や資料などの学習材が、どこにいても目につくようになってくると、教師の次の工夫が始まる。まさに、螺旋階段を登るように、周囲への気配り・生徒への思いを大切にしながら実践をしていく職員集団へとようになっていった。

5. 教科教室型教育の実践

平成11年、横浜市教育委員会「学びの内容改善事業」のモデル校、「学校施設のあり方研

究」の試行校として指定を受け、「空間・時間・集団 ―教科教室型教育の創造―」を二年間行なった。

特に印象に残った議論は、「ホームベース」のあり方である。福島・三春に代表される教室を半分のスペースにした「ホームベース」の実践に対して、学級経営の充実、学級の個性を大切にするため、さらには生徒一人ひとりの居場所を大切にするためには、現行の空間が必要であるというA中学校教員との考え方が真っ向か

らぶつかり合った。この議論は、改めて学級担任の学級経営の意識喚起につながり、学年集団のあり方、学校として学級支援のあり方、生徒の居場所づくりについて根本から考える良い機会となった。

後年、当時の基本設計に関わっていらったT大学のN教授と話をする機会があった。平成13年から平成24年度までの10年間、学校統合の為に教科教室が廃止なるまで実践され続けた話をすると、「A中学校の生徒の実態、学年・学校の運営方針を考えると、0.5のホームベースでなく、クラスルームという居場所を作ったことが、教科教室型教育成功へ繋がっていましたね。当時の先生方の教育に対する熱意を、今も思い出します。」という話をいただいた。

教科教室型教育という環境を生かした教育をさらに充実させるために命を吹き込むことに専念をした。学年を超えて教科係が集まり、教科教室の運営について生徒が約束事を作り、三年生が率先して下級生へ指導・伝達をするようにした。教師主導型から、生徒の自律による運営へと幅を広げた。このことにより、校舎への愛着、愛校心を育てることもつながり、いたずら書き、掲示物の破損などは全くなかった。

続いて取り組んだことは、学習の総合化と学習時間の弾力化による弾力化による教科指導の充実である。

生徒の学びをさらに定着・発展させるための工夫として、「学習の総合化（合科授業）」について議論を行った。例えば、理科の実験を行った後に、数学でどのように計算式をたてるか。そして、国語ではどのように発表させるか。音楽で、リズムについて学習したことを体育のリズムダ

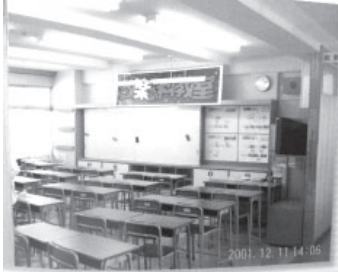
「教科教室型教育の創造」の流れ

- ◇平成6年 余裕教室活性化(学年部屋設置)
- ◇平成7年 学年部屋の整備
ソファ・テーブルの設置、談話室の役割
- ◇平成9年 学年部屋の発展的整備
学習環境の機能を整備
- ◇平成11年 社会科教室開設
図書の一部分散化
- ◇平成11年
中学校ふれあいコーナー設置モデル事業
(市教委事業)
LL教室を改修。飲料用自販機の設置。
- ◇平成11年11月
A中学校新プラン改修推進委員会発足
- ◇平成12年5月 第1期改修工事
10月 第2期改修工事
- ◇平成13年5月 教科教室完成
国語科・社会科・数学科・英語科
金木工室・美術室の一体化

ンスで、楽器を使いながらどのように表現するか等々。そのための一単位時間50分が適切なのか。「読む・書く・計算する」力をつけるためには、毎日、短時間での繰り返しを行うことが効果的なのではないか。そこで、モジュールとノーチャイムの導入を取り入れることにした。当然「チャイムがならないと、けじめがつ



視聴覚室を英語教室へ改修。教室の色はピンク。赤色系は、活動的な作用を起こすとのこと。会話などのアクティブな授業に向いている。



二つの教室の壁を取り払った数学教室。青系は落ち着いて考えるために向いているとのこと。「数楽教室」のネーミングは教師によるもの。小ロッカーには課題プリントを準備。自由に持ち出せるようにした。立体図形模型もすぐに手に取れる場所に置いた。



稼働率の低い美術室を国語科教室へ改修。水場があるために書道の授業展開に有効。教室後方に地域の畳屋さんからいただいた畳を敷くことにより、教科の特性を演出。

かなくなる。」「授業時間中に移動されると迷惑である」という意見が出た。しかしながら生徒は、校内にある時計で生活をし、移動の際は黙って移動をするようになった。「時間を守る」「他人の授業を邪魔しない」という、当たり前のことが出来るようになっていったのである。

三年生の授業中に入学したばかりの一年生が、廊下を大声で話しをしながら移動していた。

授業終了後、教科担任に苦情を申し出た。「入

学してきて、マナーがわからない一年生にどうしてあげられる。」と聞き返したところ、一年の担任に、「学校生活のマナーについて、特に教室移動のマナーについて話をさせて欲しい。」と申し出があった。

学習環境を整備することで、教師・生徒の意識が大きく変容していったのである。着任したとき、三年の教室で授業が成立していなかったことは、既に遠い昔の話になっていた。

社会性の基礎となる「自己有用感」

「自尊感情」は、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態を指す Selfesteem の日本語訳です。アメリカの心理学では以前から注目されてきた概念ですが、日本でも広く用いられるようになっていきます。例えば、「自分に自信が持てず、人間関係に不安を感じていたりする状況が見られたりする」という指摘を受け、その対策として“子供の「自尊感情」を高めることが必要”と主張される方は少なくありません。

しかしながら、日本では、児童生徒の「規範意識（きまり等を進んで守ろうとする意識）」の重要性も強調されています。それらを併せて考えるなら、「自尊感情」よりも「自己有用感」の育成を目指す方が適当と言えるでしょう。なぜなら、人の役に立った、人から感謝された、人から認められた、という「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価だからです。

『国立教育政策研究所 生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」より』

「自己有用感」とは

「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、…等、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」等の語とは異なります。

最終的には自己評価であるとしても、他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされるという点がポイントです。単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、「クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるよう頑張りたい」という形の自信です。その意味では、「クラスで一番」かどうかは、さほど重要ではなくなっている、とさえ言えます。「自己有用感」の獲得が「自尊感情」の獲得につながるであろうことは、容易に想像できます。しかしながら、「自尊感情」が高いことは、必ずしも「自己有用感」の高さを意味しません。あえて、「自己有用感」という語にこだわるのは、そのためです。～中略～

★社会性の基礎となるもの

「人（他の子供）とかかわりたい」と思う気持ちは、自らの体験によってのみ、獲得されるものです。他の子供と一緒に遊んだりすることを通して、「人とかかわることって楽しい」「人とかかわることって苦痛なことではない」と感じるところから「人とかかわり」は始まります。それが、「社会性の基礎」を形づくっていくのです。年少者の課題は、一言で表現するなら、「人とかかわることが好き」ということ、集団活動に進んで参加できることです。そして、年長者になるにつれ、そうしたかかわりを通して、進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇りの獲得が課題となります。

◆他者の存在を前提としない自己評価は、社会性に結びつくとは限らない。

◆「自己有用感」に裏付けられた「自尊感情」が大切。

『国立教育政策研究所 生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」？』より



機器も古くなり使用不可能なため、倉庫化としていたしし教室を「ふれあいルーム」として改修。小学校との交流会、地域との会合、学年を超えた会議など使用頻度は高かった。



「ふれあいランチルーム」「ベランダ」の改修に関して、A中学校のOBを中心とした地域の方々のアイデアと協力は、生徒にまちとのつながりを意識させるものともなった。

児童・生徒指導で目指す社会性の育成は、自己有用感の育成を行うことで達成することができるのである。自己有用感自己実現へ向かう大きな力となる。

教科教室の運営が、学校生活のきまりを生み

出し、そこに関わる上級生の中に育っていった自己有用感がまさに学校を変えていったのである。

社会性の基礎となるものとして「人とかかわること」が挙げられている。これは、児童・生徒指導での基本である。教師と児童・生徒、児童・生徒間、保護者等々、我々は人との関わりを基本として教育活動と関連する児童・生徒指導を行っているのであり、人が織りなす力が、

時として教育での「奇跡」を生み出す。
まさにA中学校で起きた奇跡といえる。

6. 新学習指導要領における育成する資質・能力

文部科学省では、「基礎的・汎用的能力の明確化と、その育成」について、キャリア教育、職業教育を取り上げ、「基礎的・汎用的能力」を構成する4つの能力として、ア 人間関係形成・社会形成能力、イ 自己理解・自己管理能力、ウ 課題対応能力、エ キャリアプランニング能力としている。

「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。その要素として情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等が挙げられる。

「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」

の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。要素としては、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等が挙げられる。

「学び」からアプローチをした生徒指導は、A中学校に新しい取り組みを生み出すこととなった。キャリア教育としての職業体験学習である。かつて、自らの学校生活、学習への取組から将来への不安を抱えていた多くの生徒の姿は、学校の取組の成果として、将来の夢を語り合うことができるようになってきたのである。文部科学省では生きる力をはぐくむ理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。教科教室型教育の実践の中で、何が変容したのかを整理した。

- ・自ら学ぼうとする意欲（教科教室の特性）
 - ・公共心や公德心、集団生活のルールを守ろうとする判断力の向上
 - ・総合的な学習の時間、学習の総合化による思考力、表現力の向上
 - ・「まち」や社会とのつながりを意識した学びと生活
 - ・教職員の意識改革（学びや学力の捉え方、生徒の居場所づくり）
- 【生徒、教職員の自己有用感が育ち、自尊感情が高まったことにより、保護者、地域からの信頼回復と、期待される学校へと変容】

7. 最後に

学校が変わらなければならないとき、その時期、理由、内容は様々である。時には施策として取り組まなければならにこともある。施策として与えられても、現場での実現には別な課題が発生する。

○課題のとらえ方 → 実態分析 → 課題解決
のために必要な手立て → 実践 → 新たな
課題のとらえ

いわゆるPDCAサイクル言われているもの

である。この中にリサーチ「R」も大切である
と考える。教師集団は保守的である。自らが受
けた教育が基盤であり、経験した枠から飛び出
すことがなかなかできない。だからこそ、研修
や視察が大切である。これをリサーチと位置づ
けることができる。私たちが知らないこと、そ
れが生徒たちを不幸にしてしまう。貴重な経
験・体験は、大切であるがために、固執してし
まうことが多々ある。教育の真理を忘れること
なく、信念をもち、理想を高く掲げていなくて
は、よりよい教育は実践できない。

A中学校は、小規模対策による隣接校との統合を余儀なくされ、平成13年から続いた教科教室型教育12年間の幕を、平成24年に閉じた。

教育委員会学校計画課とのやりとりで、「小規模だからこそ、教科教室型教育が実践され、生徒の学びの保障がなされているのではないか。」の私の問いかけに、「ならば、実践校が増えていないのは何故か」と担当者は返答した。

教科教室型教育を経験している教師があまりにも少ないこと、そして、予算がないという理由で、学校施設の充実を検討してこなかった。多大なる教育効果、それは学校改革ともいえることがあったことへの認識不足を感じた。残念ながら担当者から納得のある答えを得ることはできなかった。「主体的・対話的で深い学び」を実践していくためにふさわしい学習環境を、再編統合を優先し、学びの大切さを軽視したとも言える決定は残念でならない。